ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第174号（２０２０年11月）

風に戯れて

白井啓治

（十四）全員に歓びの笑顔

（２００８年11月13日）

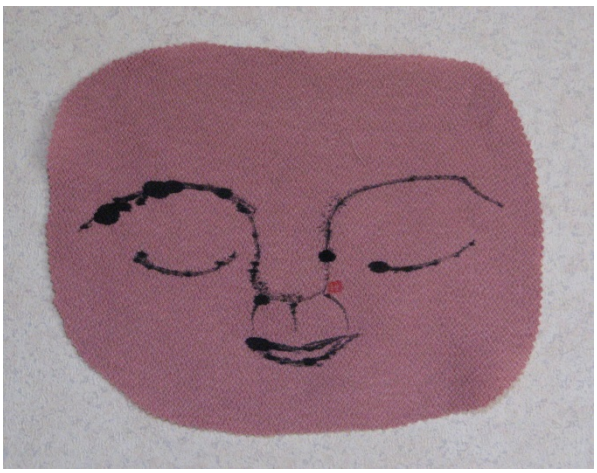
『穴掘りに汗の流して薩摩芋の埋める』

土曜・日曜になると、あちこちで収穫祭だとか文化祭だとかの催しが行われている。先週の日曜日、この９月から手伝いに行っている自給農園でも収穫祭がおこなわれた。

定番のさつま芋掘りを行ったのであるが、都会からやってくる人たちには年に一度、単純に土に遊ばれるだけなのであるが、実に楽しげであった。さつま芋をわざわざ全身土まみれになって掘り出し、今度はそれを冬季保存のために、穴を掘り、藁を敷き埋め戻すのである。単純すぎる労働であるが、裏切りの無い純粋な生産活動というのは人の心を浄化する作用もあるのだろうか、全員に素直な歓びの笑顔をつくってくれた。

土にまみれて汗する楽しさは、年に一度のことだからではない。毎週、土に遊ばれている小生ではあるが、飽きることはない。勿論、肉体労働だからそれなりに、いやそれ以上に疲れる。だが日焼けた笑顔は毎回大きく美しくなっていると思う。何故なら、その土に遊ばれるという労働には夾雑するものがないからである。

純粋に腹を満たしたい、美味いものを喰いたいという思いしかないのである。雑草むしりだとか土寄せぐらいしかできないのであるが、収穫を思いながら、これをこのように料理して喰ったら美味いだろうな、と口に唾液を溢れさせながら土に遊んでいる。



（絵：兼平智恵子）

専業農家の人には、無責任な俄か百姓と怒られるかもしれないが、野菜作りを手伝いながら、こちらが土と楽しく遊んでいる姿を見せないと、野菜の味が良くならないような気がする。うまい野菜は、人の楽しげな笑顔が作るのだろうと思っている。そういえば、綺麗な花を咲かせるために、また甘い果物をつくるためにクラシックの名曲を聴かせるとよいという話を聞く。それが事実なら、野菜達にはこちらの楽しい笑顔を見せてあげなければおいしく育たないといっても間違いではないのかもしれない。

映画の撮影現場では、全員で楽しんでやらなければ画が死んじゃう、と言われるが、野菜作りはまさにその通りだと思う。楽しんで土に作業をしなければ筋っぽい野菜しかできない。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田　昇三　0299-22-4400　　兼平智恵子　0299-26-7178

伊東　弓子　0299-26-1659　　木村　進　　080-3381-0297

編集事務局　〒315-0014　　石岡市国府 4-3-32　（木村）

HP　http://www.furusato-kaze.com/

みちのく異聞

打田昇三

「五月雨の降り残してや光堂」という芭蕉の名句がある。言う迄も無く中尊寺金堂を詠んだ句であろう。中尊寺は比叡山興隆の基礎を固めた名僧・円仁こと慈覚大師が西暦八五〇年に天台宗東北本山・弘台寿院として創建し後に清和天皇の勅命で中尊寺と改名した…と伝えられるが史料に乏しく、実際には「前九年の役」・「後三年の役」の戦没者供養に奥州藤原氏初代の清衡が建立したと考えられている。そうであれば西暦一、〇八八年以降のことになり光堂創建は少し後の嘉祥三年（一、一二四）になるが、其れでも古いから国宝建造物の第一号に指定されている。最盛期には三五〇棟ほどの建造物が軒を連ねていたらしい。

ところが其の貴重な建造物も一、一八八年の檀家（奥州藤原氏）滅亡から粗末にされ、南北朝時代の騒乱で大半が焼かれてしまったらしい。芭蕉も「奥の細道」紀行で立ち寄ってはみたのだが焼け残りしか無かったので「夏草や兵（つわもの）どもが夢の跡」と皮肉まじりの句を詠んだ？

そもそも、日本の中心が奈良・京都の時代に草深い東北の地・平泉で独特の文化と一代王国を築き栄耀栄華を極めた奥州藤原氏とは何者であったのか？…大和朝廷の侵略支配が東国に及び始めた頃の東北地方は、蝦夷（エミシ又はエゾ）と呼ばれる北方民族の国土であり、住民は幾つかの部族を形成していたが奥羽地方を阿倍（あべ）氏が、出羽地方を清原（きよはら）氏が支配していたという。両家の家系は中央政界に繋がるとの説もあり、特に清原氏については清少納言との関係も問われているようである。そうであるなら図々しい大和朝廷は部族の長を服従させ其の自治を認めて奥羽地方を間接的に支配したのだが、其処に就任した高官らも「土着」で儲けていたことになる。然も現地住民を俘囚（ふしゅう）と呼び多額の税を課し奴隷扱いをしていたらしいが、よく考えると俘囚と呼ばれた人々こそ本来の日本人であり、大和朝廷などは「余所者・侵略者」に当る。当然ながら其れに依り反乱が絶えなかったので坂上田村麻呂らが東北遠征に駆り出され、現在の秋田・盛岡・仙台などに出羽守・秋田城介・鎮守府将軍・陸奥守が配置されたのである。

奥州藤原氏も元は陸奥守を補佐した地方高級官僚だと思われるが、中央政界に君臨した藤原一族では無く下野国の豪族で“むかで退治”伝説を持ち「天慶の乱」で平将門を討ったことでも知られる田原藤太秀郷（たわらとうたひでさと）の子孫とされる。藤原三代と言われたように清衡（きよひら）・基衡（もとひら）・秀衡（ひでひら）と続くのだが、清衡の父・経清（つねきよ）の代に思い掛けない争乱が起き、清衡は幼くして父親を失うことになる。それが地方高級官僚・藤原氏に波乱万丈を齎す歴史の始まりである。

話を戻すと、阿倍氏の当主・頼良は、人望も厚く俘囚の長として陸奥国に大きな勢力を維持しており中央から監督官として派遣されていた藤原経清らに娘を嫁がせ縁者とした。ところが是を快く思わなかったのが陸奥守の藤原登任（ふじわらのなりとう）で、秋田城を護る高官として赴任していた平重成と謀り阿倍頼良に戦を仕掛けて「前九年の合戦」を起こした。

「先手必勝」と言う言葉も有るが例外もあり、柔弱な官僚に勝ち目は無いから大敗した藤原登任は京都に逃げ登り卑怯にも朝廷に「阿倍氏反乱」を訴えた。「喧嘩両成敗」と言うが此の様な場合は先ず真相を究明するのが筋であるけれども其の頃の国家中枢部に、そう言う知恵も能力も無い。慌てた政府は相模守に任官して関東に居た源頼義を、急遽、陸奥守兼鎮守府将軍に任命し東北制圧を行わせることにした。

是が日本の歴史上で「武士の登場」になるらしいのだが、そもそも源頼義とは何者か？其の二十年ほど前のこと、千葉に居た豪族・平忠常が反乱を起こした。石岡に所縁のある平高望の曾孫に当る人物である。此の時に政府に命じられて其の乱を鎮圧したのが源頼義の父・頼信で、頼義も父に従って出陣し武功をあげたと言う。後に頼義から五代目の頼朝が鎌倉に幕府を開く事が出来たのも祖先が東国経営に努めたからであり、頼信・頼義の活躍が源氏興隆の端緒となっている。

話を戻すと源頼義の武名を聞いた阿倍一族は戦う前に恭順の意向を示したので此の騒動も平和的に解決されることとなり朝廷は安心したのだが、合戦を商売とする武士は手柄を立てる機会を無くしてしまい、失業保険も無いから困るのである。

任務を終えたというより、遥々と出陣して来ただけの源頼義軍団が関東へ戻ろうとした夜に事件が起きた。何者かが源氏陣営を襲ったのである。犯人として阿倍一族の貞任（さだとう）

に嫌疑が掛けられたけれども「源氏の策謀・挑発」というのが歴史認識である。こうして「火の無い所から煙を立てる」ように諺に反して起こされた事件はやがて「前九年の合戦」という戦乱として拡大し、思いも掛けず東北地方に広がってゆくのである。

　其の頃、中央政府の官僚として奥州に居た藤原経清は、阿倍一族を監視する立場ながら阿倍頼良の娘を妻としていたから微妙な立場ではあるが、源氏陣営襲撃事件の真相を知り源氏軍の「卑劣な手口」に怒って阿倍陣営に加わった。この為に源氏は苦戦を強いられ、出羽国俘囚の長である清原武則（きよはらたけのり）に救援を要請し辛うじて勝利を得たのである。気の毒だが経清は「乱の首謀者」と言う無実の罪の名誉?を押し付けられ、極刑に処されてしまう。経清の遺児が後の藤原清衡（ふじわらのきよひら）であり、母（阿倍頼良の娘）と共に清原氏に保護され無事であった。

康平五年（一、〇六二）九月、「前九年の合戦」は終わったけれども、源氏は思惑に反して東北地方に勢力を伸ばすことが出来ず、一方で、阿倍氏の後を継いだ清原武則だけが「棚から牡丹餅」方式で陸奥・出羽に君臨することになる。それから二十数年が過ぎて、清原家は武則・武貞の跡を嫡流の真衡（まさひら）が継いだけれども子が無かった。清衡、家衡と言う弟が二人居たのだが養育された場所も違うので、真衡は二人を家臣同様に扱っており、一族郎党の間に微妙な不満対立が生じていた。其れが直接の原因では無いが予想もしない事件が起きて、然も其の事件が常陸国・筑波地方に関係することになる。

　永保三年（一、〇八三）八幡太郎義家は念願の陸奥守兼鎮守府将軍に任命され東北地方へ赴任することになった。其の頃、現地の清原家では平氏一族から成衡（しげひら）を養子に迎え、其の妻に常陸国の豪族・多気（たけ）権守宗基の孫娘を迎えることになっていた。此の女性は宗基の娘と源頼義との間に生まれたから八幡太郎義家の異母妹である。なお、多気氏は桓武平氏や石岡に所縁の有る大掾氏などの本流に当る。

　目出度い婚礼を前にした時期に、然も花嫁の異母兄である中央官庁の将軍・八幡太郎義家殿が支配者として赴任して来ると言うので現地の清原家では忙しい日々を迎えていたのだが、其処で些細な出来事が起こり、然も其の出来事が拡大して日本中を驚かせた「後三年の役」となるのである。

　東北地方最大の豪族である清原真衡の館には一族、縁者、家臣などが連日の様に祝いに訪れる。其の日も家臣格ではあるが当主・真衡の叔父に当る長老・清原家衡が祝の品として多くの「砂金」を持ち真衡を訪れた。ところが都合悪く先客と囲碁を打っていた真衡は気付かず、気が利く家臣も居らず、重い砂金を抱えて庭先に居た家衡は遂に頭に来て砂金の袋を庭に叩きつけ憤然として出羽に帰ってしまった。是を知った真衡は「儲かった」と喜ぶべきところなのだが、家衡を「不礼！」として怒り家臣に家衡の追討を命じた。

一方、家衡は、真衡を憎んでいた身内に協力を求めたので此処に清原一族の同士討ちとも言える「後三年の役」が起こるが、どちらも中途半端な集団なので両陣営が小競り合いを繰り返し戦況が膠着状態の時に源義家が赴任して来たのである。

そこで真衡は義家を味方に付けることに成功したけれども陣中で病死してしまった。そうなると相手も源氏には逆らえず、合戦は終わるしか無い。

　義家は清原一族の領地配分に介入し清衡（後の藤原清衡）に岩手県南部を、家衡には北部を与えたのだが、是により清原氏の本流が血筋では傍系の清衡領となるから、当然と言えば当然だが不満を持った家衡は異父兄・清衡の暗殺を企てたけれども失敗し、其の家族だけを殺害してしまった。

窮地に陥った清衡は「苦肉の策」とも言える手段で実父の仇敵に当る源義家を頼ったのである。

　義家は「怪しい！」と思ったけれども、合戦が商売なので要請を受け入れ應徳三年（一〇八六）秋に数千騎の軍勢を率いて敵勢が籠る沼の柵（横手市西方）を攻撃した。しかし、雪国であるから関東での戦法は役に立たずに苦戦を強いられた。是を見た敵は攻撃軍を気の毒に思ったのか、沼の柵を捨てて、北方に在った要害堅固な金澤の柵に移ってくれたから余計に攻め難くなる。

　其の頃、義家の弟で京都に居た新羅三郎義光がニュースで兄の苦戦を知り、勤務先には無断で東北地方へ救援に駆けつけた話は、現代だと懲戒処分の対象になるが有名である。其のお蔭で義家は金澤の柵を囲み、寛治元年（一〇八七）

の冬には清原家衡・武衡の軍を全滅させた。此の時の敵に対する義家の扱いは残虐を極めたようで、現地では「鬼」と呼ばれたらしい。真実なら「八幡太郎」の名が恥じる。其れが一因かも知れないが、清原氏の反乱を鎮圧した…とする義家に対して政府は、あくまでも「清原一族と源氏との個人的な争い」としたから、当然ながら恩賞も叙勲も行われず源氏は大損をしたことになるが、損失は補填しなければならないから義光の子孫が佐竹氏として茨城県北に残り、県央からは武田氏が出る（後に甲斐国に移る）など、東国に於ける源氏の基盤は、茨城県で其れなりに確保できたと思われる。

一方、奥羽地方の豪族中「後三年の役」で只一人生き残ったのは、経清の子で安部氏の血を引き清原一族の系列に加えられた清衡だけであった。清衡は姓を「藤原」に戻し、平泉に居を移して次第に勢力を伸ばし始めた。康和年間（一一〇〇年代）のことである。努力して、と言うより源氏の野心に便乗して東北の覇者となった藤原清衡は中央との繋がりを強め、やがて平泉を中心とする仏教王国を建設したのである。

清衡の子・基衡は、陸奥守として赴任してきた藤原基成（鳥羽上皇の近臣）と姻戚関係を結び現地に留めて政治顧問とした。地方の豪族に過ぎなかった藤原氏は、中央の上皇（朝廷）に直結する権威を得て「北方の勇者」として不動の地位を確立し、奥州藤原氏の都・平泉は繁栄した。然しながら「栄枯盛衰」の言葉どおり、金色堂を始めとする四十余の寺塔と禅坊三百余棟と言われた中尊寺、其れを上回る規模の毛越寺（もうつうじ）など、藤原氏三代・百年の間に東アジア文化の精髄を極め、京都を手本に建造された…と言う中世都市・平泉の遺跡は中尊寺以外、現在まで所在が分からないらしい。其の原因は当然ながら奥州藤原氏の滅亡にある。それより先、保元二年（一、一五七）春に二代・基衡が脳溢血で死亡し三代目として秀衡が跡を継いだ。其の前年には「保元の乱」があり、二年後には「平治の乱」が起きて都では天皇家の内紛に便乗した源氏と平家が血戦を展開していたのだが東北地方は穏やかであった。王国・平泉藤原氏では秀衡が妻の父・藤原基成を通じて朝廷に黄金・名馬などを贈り「陸奥守」の官職を得て名実ともに東北地方の支配に成功したことになり一族の繁栄が期待される…筈であったが、承安四年（一一七四）、一人の少年が秀衡を頼って遥々と都から来たことで歴史が大きく変わってゆくのである。

少年の名は「牛若丸」と言う。平治の乱に敗れた源義朝の遺児として斬られるところ、母親（常盤御前）が平清盛の寵を受け、其の嘆願などにより僧侶となる条件で鞍馬山に入れられたのだが、自らの血筋を知り、平家打倒の一念から山を下り、砂金売買人・吉次に連れられて奥州へ来た…と言われるが、実際には源義朝と共に平治の乱に関わった藤原信頼の弟・藤原基成が斡旋したらしい。

源義経と改名した牛若丸は秀衡の庇護のもとに平家の探索を受けることも無く平泉で六年間を過ごした。後に義経が戦術に優れた武将となる素質も其の間に培われたものである。治承四年（一一八〇）、源頼朝が平家打倒の旗を上げると、義経は「時期尚早」と留める秀衡を振り切るようにして異母兄・頼朝の陣に馳せ参じ、次々と武功を立てたが兄を兄とする義経と、弟でも一家臣と見る頼朝との感覚に隔たりが有り、遂に義経は頼朝から追われる身となった。秀衡が心配した「結果」を背負い義経は再び平泉へ逃れて来たのである。

此の侭で済めば良かったのだが、かねてから奥州藤原氏の持つ財力・軍事力に懸念を持っていた頼朝は秀衡の「陸奥守任官」に平家が関わったことを口実に「奥州追討」を考えるようになった。

是に対して秀衡は、知将・義経を総大将に奥州各地の軍勢・十七万騎を動員すれば平泉王国は護れると確信していたのである。

文治三年（一一八七）秋、北方の王者・藤原秀衡は平泉の館で六十六歳の生涯を終えた。枕元には四代を継ぐ泰衡と庶兄の国衡、そして客分の源義経が呼ばれ「…義経殿を主君として、両人（泰衡・国衡）給仕し、国を護るべし」との遺言が伝えられた。然し、此の遺言は後に破られる。

二年後の文治五年四月、藤原基成の館（衣川の館）に居た義経は泰衡の軍勢に襲われ自殺した。それを知った頼朝は「手間が省けた」と思ったかどうか、二十八万の大軍を発して奥州征伐を敢行する。各地で戦闘が行われたが、総大将の泰衡は逃げるだけしか知らない「お坊ちゃん武将」なので奥州全土は程無く源頼朝の支配下に置かれ栄華を誇った平泉大都市は戦火に埋没し、今は遺跡も満足に残らない。正に「夢の跡」である。

私が平泉の遺跡を知ったのは、遥か昔のことながら幸運と言うか、偶然と言うか、陸上自衛隊現役時代（武器補給処勤務時代）に、職場の同僚から東北地方への出張に誘われたからである。当時の私の職務は陸上自衛隊が調達する武器関係品目の受領検査に伴う事務であり、検査官任命手続きから納品書受付処理・検査官の指定・検査調書の作成・クレーム処理など、自衛官とは名ばかりのサラリーマンのような日々で、業者との対応などに追われる状態であったから出張の機会などは時々本庁へ行くくらいしか無かったのである。

一方、同僚の職務は「砲兵部隊が実弾射撃をする際に其の砲弾の初速を測定して砲の異常を検知する…」仕事なので各地の演習場を回っていた。或る日、其の同僚が「気晴らしに！」と誘ってくれたので、機材設置の手伝いぐらいは出来るから二つ返事で同行させて貰ったのである。当然、上司の許可は要るが、私は下っ端階級でも其の部署の創設以来、其処に住み付いていた古狸であるから上司も「ダメ！」と言う答えは出せない。其の時は岩手県奥地の演習場へ行って近くの部隊に泊まり、任務を終えて帰路に平泉遺跡を案内して頂いたのである。現代、遺跡には後世に仙台藩・伊達家が再建したという幾つかの堂舎も残るが、古い物は失われる…其れをどの様に後世に伝えるかは人類の任務の様に思えてならない。今にして思えば貴重な知識を得させて頂いた出張である。

4.2　正法寺

石岡市大増１６４４

親鸞聖人所縁の大覚寺に行かれたら是非近くのこのお寺「大増山東望院正法寺」に寄って頂きたい。大増の市街地をぬけた奥にある。

ここには市指定保存樹である「ヤマナシ」の古木と百観音像で有名である。大増城主、古尾谷隠岐守治貞公開祖の古刹で永禄２年（1559）８月開創され、古尾谷氏の菩提寺として隆盛を極めてきたが、古尾谷氏が主君佐竹義宣公の秋田転封に従って、当地を離れたため、一時寺運も衰退したが、慶安元年（1648）に徳川３代将軍家光公から御朱印三石を拝領し、再興した。本堂は元治元年（1864）火災に遭い焼失したが、慶応２年（1866）に再建された。

石段わきに十八羅漢様の像が置かれている。釈迦の弟子十六羅漢に加えて２人の羅漢を入れて十八人の羅漢様だ。

十八羅漢：羅漢様は普通「十六羅漢」様ですが、正法寺の羅漢様に付いては、慶友尊者と賓頭盧尊者を加えて十八の羅漢様と成っています。

「羅漢」とは、価値ある、尊敬するにふさわしい人、供養を受けるのにふさわしい人を意味しています。十八の羅漢様は、お釈迦様の弟子達で、私達と同じ煩悩を持って悩み苦しむ人達でありましたが、縁あってお釈迦様の教えに接し、出家して弟子と成り、その教えのままに精神修

行して、ついには悩み苦しみから解脱した方達であります。

（現地看板より）

また、寺の入り口付近にはたくさんの二十三夜の石塔が立ち並んでいるのも圧巻だ。

石段左側には清らかな水の流れと紫陽花がきれいに咲いていた。

寺の入口に多くの二十三夜塔がある

石岡市認定保存樹「正法寺のヤマナシ」

幹周：1.5ｍ　樹高：12.9ｍ　推定樹齢：不詳

この木は日本古来のナシでバラ科の落葉高木。奈良時代に栽培されたものが野生化して山中に自生したり、人家周辺に植えられたりした。

縁起を担いで「有りの実」ともいわれる。花は白色五弁で、実は小粒で堅く熟すと甘酸っぱくりんごのような味がするが、おいしくはない。

長十郎や二十世紀梨の元祖ともいわれ、材質は堅く、家具・彫刻材に用いられる。この寺は永禄2年（1559）織田信長、今川義元の桶狭間合戦の頃の創建で、元治元年（1864）に一度火災で焼失しているが、現在まで23代続いている。

門を入り18体の羅漢像が両側に並ぶ石段を上がると、甘柿とヤマナシの古木が、仁王様が手を広げて参詣人を迎えるような姿で立っている。いかにも果樹の郷の古刹らしい。

平成17年3月　石岡市教育委員会

今から少し昔のまだ町の明かりも少ない頃、このヤマナシの木の上にムジナが登ってまん丸の月を持ち上げると、決まって、遠い山の中腹に狐の嫁入りの灯が灯って見えたとお寺の住職のお話もありました。

〈百観音像〉

戦国時代中期より江戸時代に坂東33ヶ所、西国33ヶ所、秩父34ヶ所合わせて100ヶ所の観音様をお参りすると願い事が成就するといわゆる日本百観音巡礼が行なわれてきました。しかしこの100箇所の札所をすべて巡礼するのは体力的にも財力的にも大変で、これらの巡礼できない庶民人のために、これらの百箇所で観音様の像の鋳型もらい受け、これを寺の観音堂に納めてこの観音堂を参拝することが全国的に行なわれてきたのです。この正法寺にもこれら百観音像を安置しており、庶民信仰の中心となってきました。

我が労音史（24）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1994年の社会情勢と音楽状況

ドーバー海峡（英仏）トンネルが開通。日本女性初の宇宙飛行士（向井千秋）を乗せたスペースシャトルの打ち上げが（米ＮＡＳＡ）成功。朝鮮見主主義共和国の金日成主席が病死し、息子の金正日が世襲する。ロシア軍（４万人）チェチェン共和国に侵攻。前年のコメ生産が大凶作でコメ不足が全国に拡がり、タイ米等を緊急輸入。羽田

内閣（新生党・公明党）が二ヶ月で退陣し村山内閣（自民・社会・さきがけ）が発足、この連立で社会党が自衛隊や日の丸・君が代を容認、自らの基本方針を前面撤回。関西空港（'87 年着工から 7 年）開港、借入金の利息は一日二億円と言われている。名古屋空港で中華航空機墜落（犠牲者 264 名）。ＰＫＯ協力法でルワンダに自衛隊が海外初出動。オウム真理教による猛毒ガスサリン事件が勃発。長野松本市の住宅街でサリンが充満し 7 名が死亡、重軽傷者 600 名以上。（翌年には地下鉄サリン事件が発生、被害がさらに拡大、多くの死者と 5000 名を超す被害者）

大江健三郎（作家）が日本人二人目のノーベル文学賞を受賞。リヒテル来日、「モーゼとアロン」（東響・秋山和慶指揮）「ムツェンスクのマクベス夫人」（東フィル・大野和士指揮）「狂気との生活」（モスクワ・シアターオペラ）等が上演される。

この年に逝去された音楽家・文化人：長門美保（歌手Ｓ）・属啓成（音楽学者）・三木鶏郎（作詞家）・渡辺浦人（作曲家）・千田是也（劇作家）・児玉邦夫（ピアノ）・片岡仁左衛門（歌舞伎）・飯沢匡（劇作家）・乙羽信子（俳優）・細川隆元（評論家）・ニニロッソ（トンペット）・東野英治郎（俳優）・吉行淳之介（作家）・金日成（政治家）

1994 年の労音の動き

バブルが弾け不況が長引き、文化芸術活動も深刻な状況が続いている。第 42 回総会は、３年間の成果と問題点を明確にし「10000 名の会員」「1000 サークル」「300 名の委員」の組織目標と民主運営を基に企画方針：ブロック労音確立向けた年間企画と共同企画（地域例会）の強化、そして「脱出」「ふきの会」「第九」等の 40 周年記念企画などの企画に責任の持てる体制。会館やセンターを利用した企画（地域性）の充実。

事業方針：会員、委員、活動家など多くの人が参加できる「友好祭」「各種の集い」の計画と実行。演奏サークル・合唱活動の充実で、労音運動との結びつきを強化する。

財政方針：予算に基づいた活動（財政計画）進め、健全財政を確立させる。

この時期の社会状況は、政治のオール与党化から「消費税率の引き上げ」「お米輸入の自由化」「自衛隊の海外派兵」「小選挙区制」「年金法改悪」「政党助成法」など国民不在の政治は、各政党の無節操な離合集散の繰り返しは政治不信を広めた。村山内閣時の目玉「不戦決議」は内容的に大きく後退し、内外からの不信を一層募らせた。こんな中、被爆・戦後 50 周年に当たり、愛と平和のコンサート「カンタータ脱出」を企画し成功させる。この成功は音楽文化の面（平和の歌声をアッピール）で、改めて労音運動の本来的な役割を明確にして原点に立ち返った運動を進めることを確認した。

厳しい状況のクラシック例会（年間 37 回）は、「デミジェンコ」「チモフェーエワ」等の全国共同企画が困難だった。都内での外国人アーティストは多く開催されていて話題性の乏しい状況です。映画音楽をオーケストラで演奏する「シネマファンタジー」の企画は、新しい企画としてある程度成功をした、この様にオリジナリティを持った企画が求められている。クラシック例会セット券は数十名しか組織できず、今年も不況だった。第九の取り組みでは、社会情勢や経済動向の影響と団員への働きかけ不足で、合唱団員・例会組織の目標が未達成に終わる。目標達成（合唱団員）への方針と対策を練り挙げ、特に男性合唱団の組織に力を入れることが必要です。更に途中退団者を多数生んでしまったことは問題で、会場や日程の設定など肌理細やかな体制を作る必要がある。創立 40 周年記念の、カンタータ「脱出」は全運営委員が総力を挙げて取り組むことが決議された。更に地域や民主団体のも呼びかけ、目標の合唱団員が組織できた。各地域センターも練習会場に設定し（人間を返せの取り組み以来）合宿や交流会で深め合った。マヤ・プリセツカヤ舞台生活 50 周年記念例会は、東京文化会館・府中の森で 5 ステージを行い、一万人の組織で大成功した。マヤの瀕死の白鳥は感動的で年齢を感じさせない舞で、驚きと尊敬の思いが聴衆を感動させた。成功の要因として、格安会費設定と公演回数を絞ったこと、更にマヤの瀕死の白鳥への期待感が高かったことが挙げられる。

ポピュラー例会は、昨年 52 例会を上回る 72 例会を行ったが、1 回あたり 905 名（昨年９９０名）と１０％近くの低下を招いた。長引く不況や阪神大震災の影響もあるが、苦労した割には成果が表面に出ず、今後の企画制作の整理が必要。由紀・安田の装用例会は依然好評で、土の例会も成功している。高石ともや・なぎら健壱のフォーク例会は安定しているが、恒例の菅原洋一・美輪明宏・デューク例会は、昨年より２～３００名の減になった。久しぶりの登場は、原信夫＆シャープ・ビーバンバン・サーカス等がある。

伝統例会「高橋竹山」は、７ヶ所（北とぴあ・練馬文化・我孫子市民会館・松戸森のホール・新宿文化センター・府中の森・武蔵野市民会館）で行

われ何れも成功させた。「高橋竹与」「高橋竹童」は５ヶ所（北とぴあ・松戸森のホール・曳舟文化。府中の森・砧区民会館）で取り組んだが何れも苦心をした。今後竹山は演奏活動休止になるため、竹与・竹童をどう広めるかが課題となる。都心で定期的に取り組んでいる「野村狂言の会」、東部で取り組んでいる「荒馬座」は、其々地域のファンと協力し成功させた。

財団「全国労音会館」助成で取り組まれた全国労音共同企画は、ハバロフスク少年少女民俗アンサンブル「ベショールカ」モンゴル民族アンサンブル「ターリン・ドゥーラル」。「ベショールカ」はホームスティを条件に、東部・東葛・都下が取り組む。受け入れ先で諸々のエピソード（ステイ先の若者との恋）等が生まれ、思い出のある楽しい企画となった。「ターリン・ドゥーラル」は、モンゴルに代表団を送り、モンゴルのアーティストを初めて招聘。全地域で取り組まれたアンサンブルは、馬頭琴・ホーミー・オルティンドー・モンゴル舞踊等、聞いたことのない芸術に興味深い演奏会となり高い評価を得た。

５年間進めてきた、ブロック労音としての独立採算体制を総括した。長引く不況と社会状況の不安は、多くの人口を抱える都心部の組織活動に影響し厳しさが生まれた。そこで都心部（都心・西武・南部・北部・城北）の財政を一つにして都心部の労音運動を強化する。地域例会と本部扱い例会を併せた例会政策を進め、各地域センターを活用する管理部門を設け、充実した活動を展開する。東部・都下・東葛は、これまでの成果を発展させ、強固な基盤づくりと拡がりを目指すことを決議した。

例会外の活動として

・原水爆禁止世界大会に、広島・長崎アッピール署名をもって、東京労音から４名の代表を送る。

・夏の友好祭は全ブロックで取り組み、長谷川武久氏の「音楽の楽しみ」の企画を中心に、フリーに参加できる（１泊、２泊参加の自由／ブロックごとの自由行動）体制で好評を得た。

・十条会館で６０名が集まり新春交流会を開催。第一部に、阪神大震災の義援金や今年度の抱負についての話し合い、第二部では猿回し（ゲスト）や各ブロックからの出し物で交流した。また、今年度は全体での委員会開催が出来ず今後の課題とした。

・演奏サークルの活動

「労音合唱団」は、大阪第一合唱団とジョイントコンサートの実施（大阪会場）。東京労音主催の「イタリア音楽紀行」に特別参加。第九合唱に９名が参加。

「アコーディオン研究会」は、高崎市の受賞パーティに出前コンサート。関東アコーディオン演奏交流会でソロの部２名、合奏の部で其々入賞し、発表会を開催。「日本の歌声祭典」に参加。

・「六弦会」は、毎年ギター初級講座の開催。（今年で６回目）ＯＢを中心に結成された「Ｒ，ｓギターアンサンブル」は月一で練習、今年は演奏会を予定。

・「民億音楽研究会」は、民族芸能「白久の串人形」の見学／民族音楽教室夏期講座の開催／北区特別養護老人ホーム「浮間さくら荘」訪問演奏会／草加高校文化祭に特別参加（新曲さくら）／大谷バレェ団チャリティコンサート「夢まつり・日本のしらべ」に参加／東広島市中央公民館「心に響く邦楽コンサート」に参加（「こだま婿」他を演奏）。

・「車人形教室」は、広島県沼隈郡沼隈町主催の平井澄子の世界に、新曲「さんしょう大夫」で参加。

財団全国労音会館は、この年次の助成活動を行うハバロフスク少年少女民俗アンサンブル「ベショールカ」１６回／モンゴル民族アンサンブル「ターリン・ドゥーラル」２２回／「ニコライ・デミジェンコ（Ｐ）」１３回／「チモフェーエワ（Ｐ）」１０回／「オデッタ」９回／「マヤ・プリセツカヤ」５回など、延べ７５回の助成を行った。また、労音大学（姫路労音主催）原水禁世界大会への派遣、「車人形教室」などにも助成を行い、労音運動発展への寄与をした。

全国労音の動きは、東京の東高円寺で第３９回全国会議が４３団体９０名で開催される。加盟団体は６５労音、会員制度の確立と民主的運営について討論された。東京労音は関東労音の代表団体として、他の８団体と活動を進めてきた。今期は「共同企画を進め成功させよう」「運営の民主化を強め担い手を増やそう」「ブロック間の交流を深めよう」「文化や生活を破壊する消費税、憲法改悪に繋がる小選挙区制の撤廃運動を進めよう」の４点を活動方針として進めてきた。ことし９番目の労音として深谷市に「虹の音楽鑑賞会」誕生、更に狭山市に新労音誕生の機運が生まれており、盛り上がりのある一年だった。

（つづく）

石岡市指定文化財（二十八）　兼平智惠子

石岡市立ふるさと歴史館では十月七日（水）より「古墳出現」と題し第二三回企画展が行われています。コロナ禍の中、県内外、市内の古墳に心寄せる皆さんのご来館が続いております。

茨城県で最大を誇る前方後円墳、舟塚山古墳
石岡市で一番古い前方後方墳、丸山古墳
石岡市で最も古い前方後円墳、佐自塚古墳

その時代の進展の様子をお墓から読みとると言う、今回の企画展では弥生時代から古墳時代にかけての集落や墳墓の調査成果と石岡における「古墳の出現」を紹介しています。

「あっ、弥生の土器の上に、土師器の小さな甕がのってみつかったぞ」

昭和五十五年外山（とやま）遺跡（南台）の発掘調査中、担当者が思わず発した言葉だそうです。

弥生時代の石岡では、縄目で文様をつけた土器が使われていました。その土器の上に文様がない古墳時代の土器「土師器（はじき）」がのっていたのです。弥生時代と古墳時代の遭遇！担当者の興奮が伝わってきます。

今回の展示ではこの重なった土器が私、お勧めの文化財です。是非、古の人が大切にされていた器に会いに来て下さい。

担当者の方の興奮から四十年！近年では佐久上ノ内（かみノうち）遺跡（八郷地区）や弥陀ノ台（みだノだい）遺跡（小井戸）などの発掘調査が行われて、弥生時代から古墳時代への移行期の集落の様子や、王の住まいと考えられる「豪族居館」の様子などがわかってきました。また、柿岡・佐久（八郷地区）は丸山古墳や長堀2号墳、佐自塚古墳など古い時期の古墳（前期古墳）が多く存在し、「常陸屈指の前期古墳の集中域」と注目されてきました。近年測量調査が行われ、新たな知見が得られているそうです。

参考資料　企画展冊子「古墳出現」

本題の文化財紹介に入ります。

柿岡城址
柿岡二一五九―二
史　跡
昭和四七・四・一九指定

旧八郷町の中心だった柿岡には、先に述べましたように古い時期の史跡が多く存在しています。この地の歴史には不明な点が多いが源頼朝配下の武将だった八田家の子、時家（時知とも言う）が一一九二年（建久三）頃に城を築いたのが始まりとされている。時家の家系は後に柿岡氏を名乗り、約三百年にわたってこの地域を治めました。

柿岡城は舌状台地の端に築かれた平山城である。本丸は現在の柿岡小学校内、丸の内稲荷付近と見られ、近くには土塁と堀が残る。また台地東端には、かつて見張り台を兼ねたと思われる諏訪神社がある。

やがて常陸国の支配を進める佐竹氏の配下となり、佐竹氏の家臣たちも梶原政景（武蔵国岩槻城主、太田資正の次男）―　真壁房幹（一五六九年佐竹氏は小田氏治の小田城を攻め落とし、政景が小田城に移った為城主となる）―　長倉義興（真壁氏一五九五年大島城へ、長倉城主が城主となる）―　国分盛重（一六〇〇年に義興城主が亡くなった為）　と次々と城主がかわりました。

慶長七年（一六〇二）佐竹義宣が出羽国久保田に転封となり、国分盛重も出羽へ移る。その後は、将軍家光の乳母春日局の子、稲葉政勝の所領となって、柿岡藩が置かれたが間もなく政勝は、小田原藩主に転じ、柿岡藩は廃された。

明治以降この地には小学校や町役場などの官公庁舎が次々と置かれ、台地のたたずまいは、かの柿岡城をしのばせている。

参考資料現地説明板　他

訪れました時は冷たい雨が降っていました。日曜でしたので小学校の中には入らず、舌状台地を一回り、斜面には色々な木々や花々がしっとりと輝いて、台地には小学校、農村高齢者センター、保育所、残念ながら説明板にありました土塁、稲荷神社をも確認出来ず、西側に中学校の門があり覗きますと、「和顔愛語」の記念碑、「おだやかに、やさしく、あたたかい言葉」今の世の皆さんにもお贈りしたいことばに出会えました。

○にぎやかに微笑み返すつわぶき　　智惠子

蓮

伊東弓子

今年の夏、紅の蓮の華を見た。

若い日にある寺で一瞬、眼にした坊さんへの思いに心を燃やした、私の心の色のようであった。何日か後、どうしたかと、尋ねるようにその道を通ると紅の花弁が一枚、二枚と散っていく姿を目にした。散っていく色も、姿も美しいと見とれていた。葉が重なりあっているので水面まで落ちていかない様子だ。

高崎地区の大半が蓮田のため、何の道を行っても蓮を見られた。大きな葉、真直ぐ延びた茎、その先に蕾、咲き誇る花、散りいく花びら、それぞれの姿がある。どれも白い蓮の姿だ。

あの感動の日から二ヶ月も経ったか。あの暑さの中でしっかりしていた勢いは何処へやら、すっかり蓮田の風景は変っていた。真っ直ぐ立っていた茎は、生気を失いミイラのように変色し、やっと立っている姿にも見えた。

この間まで青々と広がっていた葉の一枚一枚が揉み苦茶にされ縮んだようだ。痩せた男がぐしゃぐしゃのシャッポを被ってたいして重くもない首を垂れて立っているようにも見える。背の高い低いはあっても群れをなして何処かへ行こうとしているようにも見えた。“何処へ行くの”と、声でもかけたい思いだった。ただ黙々と群れをなして何かを目指しているようだった。勿論、答えも無いまま、又々何日か経った。細い身は腰を曲げ、首とシャッポは水苔の中にどっぷりつかりきっていた。やがて泥と一体化してしまうのだろう。あの紅の花びらも泥に同化したのだろう。おしいな。

以前は、今からが蓮掘りの時期に入るのだった。冷たい朝、寒い道に向かう人々からは「水の中は意外と温かいんだよ」と、聞いていたがどうだったろう。長いこと蓮作りをしてきた人が、神経痛を患ったり、冷え症になったと聞いた。体への影響も多かったようだ。山あいの温泉でゆっくり浸かってきた、湯治に行ってきた話しも多かった。こうして体をゆっくり休める時間を持てたという。今はビニールハウスも使って一年中作れるし、研修生という労働力を利用し、機械化もされて労力の面でも随分と形が変わった。生産高も上り土浦産地の一部に加わり、勢いがよくなっている。朝早くから発動機の音が煩い等のいざこざもあるが、若い研修生の表情は明るく挨拶の声も響きがいい。日本の若者とは一寸違う。この若者達を経営者は大切にしてほしいと願っている。水田とは違う蓮田の抱えている問題の多いこともよく聞く。

丁度晩秋の枯れた蓮田を写真に収める人が多いのも、何か心に訴えるものがあるのだろう。仕事に行き詰って苦しいより悲しみが込みあげ日曜日になると、家を出て寺歩きをした若い日があった。何故、寺へ足が向いたのかは記憶にないが、石岡、千代田、玉造・・・と。中でも八郷の板敷山大覚寺の境内の大きな池に枯れた蓮を見た。この池は裏見のない池、何処から見ても良い姿、住職さんのその言葉に感動して帰って来た遠い日、朽ちた蓮田の辺に三角溝そばの可愛い花が陽を受けていた。私の心を知ってか優しく癒やしてくれた。

蓮に纏わる話しをあれこれ思い出す。

お葬式の使いで行った番頭さんが帰ってくると、姉弟三人に必ず蓮の花の塩釜をくれた。あれは大きな楽しみだった。

田余村役場時代の話し、小学生も低学年だった心の中に、確り記憶に残っている出来事があった。役場に入って来た男の人が、いきなり怒鳴り始めた。

「わしは、戦争に負けたから帰ってきた。向こうで働いた金も、財産もみんな置いてきた。悔しいったらない。泥沼のようなこんな田余に戻ってきたが、全く情けない。わしは田余という泥沼に咲いた蓮のようなものだ」と、言って出ていった。私は何故そこにいたのかは覚えていないが、その日のことを確り覚えている。

春、蓮田は今年の蓮のため、床を整え小ぶりの蓮が植えられる。この時期が、空を写し風が小波をよび、取りを招き、草々の芽をさます。水の中の泥もたっぷり陽の光を浴びられる時期だ。

その頃、蓮の芽を食べに鳥がくる。若芽を食べられると農家は大変、死活問題だから。捕らえた鳥を見せしめとして下げておくそうだ。“全く！”と、ぼやいていた人の話しだと、野鳥の会の人達が、“残酷だ、やめてほしい”と、抗議に来たそうだ。その後、どうしたろう。

早い！　芽が出、葉出たかと思う中に開き、蓮田を覆いつくす、蕾をもち、次々に開く、耕作されている蓮は白い花ばかり、朝早く蓮田に行けば花開く音が聞けるというが、一度も確かめたこと事はない。

上高崎よりの霞ヶ浦に野生の蓮は赤い花だった。実も葉も花も小ぶりで、実は堅いとのことだった。お盆近くになると、花や葉を取りにいく地元の人は許されていたようだ。堤防が出来て水の流れ、動きが変ったせいだろうと言われているが、今は

すっかり姿を消した。自然のものはなくなって、手を加えているものが残っていくのか、とも考えると一抹の淋しさがある。

でもこの時期の勢いよい姿を絵にする人も多い。生命力の強さを感じるからだろうか。

少女時代、姉弟、従姉妹で大井戸の蓮田の道を歩いた。従姉妹が盆のお参りに来た日だったか。もう六十年以上前、すでに大井戸地区では蓮つくりが始まっていたのかと、改めて歴史の一つを感じる。

娘はこの葉の大きさや揺れ動く様子、水面も見えない様が、とても恐ろしいという。この時期、蓮田の道を車で走るのは、嫌らしい。何がそうさせるのかと、思ってやるだけだが。

雨上がりの朝など、大きな葉の中に転がるように水玉がある。これが朝陽を受けて美しく光るのを何度も見た。何ともいえない。手の掌に乗せてみたいが、壊れてしまいそうでよした。そのとき、そのすぐ傍であの紅の華を見つけたのだった。幻ではないと、自分に言い聞かせながら、あれから何度同じ想いで通っていることか・・・。

そういえば子供の頃、蓮の葉や、里芋の葉に乗っている露を集め、墨を刷って七夕の短冊を書くと字が上手になるという話があって、ずっと少女時代、娘の頃まで真面目に続けた。畑の里芋の葉から集めるのは一苦労だった。字は上達したのだったかな。母も一緒で楽しかった記憶が残っているだけ。

荒川沖の姑の待つ家に帰る時、土浦を通る。花盛りの蓮を一本位、土産にしては、と言い出すと夫は“作っている人の身になれ、途中で折るとそこから腐りが入るんだから”と、たしなめられた。

舅の実家のある山形、天童では、だいじんどんの家の幸、不幸の時でもなければ蓮の料理は作れなかったと、よく姑から聞いた。貴重なものだったので、今、考えられないと話してくれた遠い日、みんないなくなってしまった。

今迄の私は蓮を崇高なものと思っていた。古い薄暗い本堂の佛さまの廻りに、彫刻に、絵本の中に、蓮は共にあった。

母が幼い弟の眠る時、「がんにしくどくびょうせい・・・」と、お経の一節を唱え、極楽浄土の話しをしてくれていた。父を助けてお彼岸参りに行く母の足音を胸にとめて育った。日曜日に家族で本堂でお勤めをし、父から聞いたお説教もいまだに心の中に身の中に生きている。

蓮は崇高なものとして、でも私の傍にあったものと考えてきたが、今は食料の一品としての存在が強い。それも生きていくために必要な物だと、言い聞かせながら、それでも体は健康を保ち、心は常に何かを求めていきたいものだ。

いつの日か、あの紅の美しい蓮のもとに行くことになるだろう　私。　それまで元気で生きていきたい。

トーチカ

小林幸枝

北海道の十勝平野の南で、太平洋に面した町大樹町（たいきちょう）は、最近は民間の宇宙ロケット発射上などがあり、宇宙関連の企業誘致などで町つくりをしている。そんな大樹町の海岸でコンクリート製の人工建造物が上の崖から崩落しているのが見つかった。それは、第２次世界大戦未期に造られた旧日本軍の「トーチカ」だった。

今年９月下旬、十勝総合振興局が河川パトロール中にこのトーチカが崩落していたのが発見された。今から３年ほど前に海岸に面する崖の上に海に飛び出すようにしたトーチカが発見され、まるで宇宙に飛び出しているようだと話題になっていたが、ついに波の浸食などで周りが削られ、崩落してしまったものだという。

トーチカとはロシア語で「点、地点」を意味し、コンクリート製の防御用陣地のことだ。太平洋戦争末期の１９４４年以降、米軍の本土上陸に備えて道内には数多く造られたという。町内だけで18基が残っていたという。このトーチカは、高さ約４．５メートル、幅約５メートル、奥行き約６メートル。当初は土中に埋められるようにつくられていたらしいが、戦後75年の間に海岸の浸食が進み、土中に築かれたものが崖から飛び出すように露出した。ドローンで海側から近づくとコンクリート壁に木枠の一部が残り、海岸線を睨むように四角い銃眼が開いているのが確認された。

町教委の担当者は、「この町には、今もどこかに戦争の跡が眠っています。これから当時を知る人がいなくなっていくので、これをどう伝えてゆくかが大事になってくる。そのため町で管理する残

された他のトーチカを使って、戦争の悲惨さを後世に伝えていきたい」と話しているという。

戦争を経験した人が段々いなくなり、本土決戦などを考えていた当時の姿を伝える貴重なこのトーチカのことも是非記憶に留めておきたいと思います。

〈父のこと　26〉

菊地孝夫

朝の6時に自転車を走らせたら、手が冷たい。秋がいよいよ深まった。

またぞろ、おかしな動きがある。日本学術会議のメンバー選定を巡って、6人が任命から外された。理由はまともに説明されない。

独裁国家を非難する割には、公文書の情報開示も行われない。訳の分からない「説明」ともいえない理由でもってお茶を濁そうとする。当然臨時国会は紛糾するだろうが、またぞろ、「官僚答弁」に終始するだろう。

研究、教育機関に圧力をかけて政権に批判的なものを排除していく。

どうみても、改憲論者を標的にしたのは明らかである。では、改憲論者にききたいけれど、現在の憲法で困っている人はいるのだろうか？少なくとも私はちっとも困っていない。憲法を変えたがっている面々は、防衛問題にからめたり、成立の経緯が、アメリカ占領軍によって押し付けられたものと言っている。

現実には、非武装中立の憲法をなし崩しにして軍隊を持っているし、武器の輸出までし始めた。軍需産業をテコ入れして、武器輸出国になろうとしている。軍需産業はぼろ儲けできるからに他ならない。海外派兵も行った。先制攻撃も正当化しようともくろんでいる。

軍事大国化すれば、その矛先をどこかに向けるようになる。刃物を持てば使いたくなるのが人情というもの。

此の国は残念ながら、歯止めの利かなくなる欠陥を持っている。武力の保有はあくまで外交手段の一つなのだけれど、それが目的化してしまう。文民統制〔シビリアンコントロール〕というけれど、極めて危うい。

巷に出回っている書籍には、たとえば「ノモンハン事件は勝っていた」などという本が何冊も堂々と売られている。呆れた話である。

「事件」ではなくてソ連軍と闘った「極地戦争」であって、旧日本陸軍はコテンパンにやられてしまった。そうした事実を平気で枉げてしまう。

だから、当時の軍部は極東ソ連軍を恐れて、満州国国境に関東軍の大兵力を常駐させたのである。その結果として、国民は重税にあえぐことになる。資源の少ない小国が、身の丈に不釣り合いな軍備をしようとすれば、その予算を確保するためには、否応なく他国の資源を狙わざるを得なくなってしまう。

こうした本の著者は、かつて日本は他国との戦に一度も勝地占領したことがないのを知らないのだろうか？

朝鮮半島を攻めた、白村江の戦いでも、秀吉の朝鮮出兵でも、最後は負けである。日露戦は勝ったというけれど、良い所引き分けである。日清戦争は、清国の内紛と腐敗による瓦解が進んでいたので、勝利した。それでもかなりの兵力が失われ、国家の財政も疲弊した。

アメリカ、ロシア、中国、フランス、イスラエル等、軍需産業が基幹産業となっている国々では、国際紛争や内紛がなければ武器が売れなくなる。いつになっても紛争がなくならないのは、こうした需要を必要としている国々がある所為だ。

コロナの所為でみんなが内向きになっている気がするのはわたしだけだろうか。

これから、インフルエンザの流行も懸念されているけれども、同時に二つのパンデミックがあったという記憶はない。新型コロナがあまりにも強力なので、いきおいほかのウイルスは駆逐されてしまうのじゃあないかと考えるのは素人考えか？

当面有効なワクチンはできそうもないし、対症療法しかないのではないかと思える。

外出も控える機運だし、こうして原稿を書くのも、気分が乗ってこないようで。

それでもこの機会に、読書に励むというのも悪くはないと思う。

灯下親しむ季節というし。

皆様どうか、お体御大事にとしか言えません。

風と共に　《理》

大輪啓展

七　出会い

衣替えも難しい季節の移り変わり、日中の陽射しは未だぽかぽかと暖かい陽気で、夜には朝方の霜が降りてきそうな、微妙な日々が続きますが、皆様におきましては体調に気をつけて頂きたいと存じます。

今回は、

人生における様々な出会いと、それにまつわる道程を少し。

出会いとは突然で予想し難く、それでいて良くも悪くも自分の人生に相当な影響を及ぼします。

当然、生を受けたその日から始まっていきます。

両親との出会い、

この時代、数えきれないそれぞれの人生がその人を主人公として、

どんな人生を送るのか、兎も角、その人の人生最初の出会いが両親です。

産まれて来る場所は選べない、なんて事を耳にした事もありますが、人生初の出会いは良いものとなるのか、はたまた悪いものとなってしまうのか。

いずれにせよ、その答えは自ずと見えてきます。

幸いにも私は、良い巡り逢いの中で良い両親と出会う事が出来ました。

時折りテレビから聞こえて来る、肉親同士の諍いは私には信じ難く、この様な事が現実に起こりうるのかと耳を疑った程でした。

次に友人との出会い、

家族とは違う世界の中で、ある意味では演じながら、ある人にとっては心の拠り所であったり、親友、悪友等呼び方は多様にありますが、気の合う仲間同士で集まり、時に励まされたり支えになったりなられたり、学んだり喧嘩したり。

外の世界へと難なく出ていける様、様々な事を吸収できる相手でもあります。

私自身の交友関係についても、多種多様な分野をそれぞれが得意とし、程よい距離感を保ちつつも老若男女とある程度の年齢層での付き合いがあります。

次に社会における上司・部下・同僚との出会い、

以前にも触れた事がありますが、ここが大人や社会に出てからと長くを共にする、大きなウェイトで重要な部分です。

何に対してもそうですが、おおよそ　対　人　なんですね。

自分好きな仕事と長く続けていく事ができる仕事では、そこに対人関係が重要となってきます。

夢中になって集中して良い仕事をする、達成感もあってやり甲斐を感じます。

ですが、日々の自分を取り巻く対人関係が良くないと、折角見つけた天職を失ってしまう可能性もあるんです。

また、様々な分野で大手と言われる大企業、ある一つの品物を買いに行く時、先ずは失敗しなそうな大手（有名）な所を選びませんか？？

その時に、相対した人との相性、感覚が合わなければ、例え品揃えが豊富で安くても、不便でも相対した人の印象が良ければ、そちらへと移っていく事でしょう。

皆様も少なからず経験があるのではないでしょうか。

それでは、どの様にしていく事が、大半の人との出会いの中で、悪い印象を持たれず、リピーターあるいは、長い付き合いとなる様な関係性を築いていけるのでしょうか。

多様な観点から思考する必要がありそうですが、私自身は、第一印象には気をつける様心がけています。

全く知らない人同士が出会った時するのならば、当然相手の事など何一つ知りませんから、交渉の上でも優位に立てる様、常に背筋を正し・小綺麗な格好を意識して、自然な笑顔と相手に通る様な声、その辺りでしょうか。

こうすれば、１００％こうなると分かっていれば、事前に対策も出来るでしょうが、最初に申し上げた通り、出会いとは突然なんです。

ですから、自分が好意を持つ、持とうとしている相手から、少なからず第一印象で悪く思われない為にも、意識すれば出来る事、実際にやってみて

はどうでしょう。
変化のないと錯覚しがちな日常に、少しの変化も起こるかもしれません。

この続きは、次月とさせて頂きます。
内容は全て私の主観です。

【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし（45）　　さと女

秋が来たと思ったら何時の間にか冬の便り、北の方ではもう雪が・・・。

・笠間の栗農家さん、一個の栗のイガの中に5個も実が入っていたとの、投稿が載っていた。我が家の栗の木では7個もの大家族の栗が落ちていた。

・昨年来の珍道中かと・・・今年は大人の旅に近づきました。矢部さんの人形もたくさん展示されていてじっくり見ることができ、街歩きも楽しかったよね。ソースカツ丼に名物”ひもかわうどん”美味しかったです。Hちゃん有難う。

・楽しんで来ました。今日から始まった地元の人形作家矢部藤子さんの個展。どこかで会ったことのあるような臨場感あふれる人形たち。割烹着姿のおばあさんなどは、私が八郷に居を移した当時、集落の催事などを事細かく教えてくれた凛とした方にそっくり、ほほえましく懐かしい感じがしました。また、会場である桐生の“とおりゃんせ”迄、1日のスケジュールを立ててくれたHちゃんのおかげで美味しいランチ、楽しいローカル線のミニ旅が出来ました。ありがとうございました。

・本日の夕食はシュウマイ、皮の代わりに農家さんから頂いたもち米をまぶす。おにぎりの様な大きなシュウマイが出来、お腹いっぱいになった。農家さんにはお礼にと、栗ご飯を届ける。その帰りには、ゴーヤとナスを持たせてくれた。更に隼人瓜などを頂き行ったり来たり、田舎暮らしはこういうやり取りも楽しいものです。

・金木犀の生垣は今が満開。裏庭のジンジャーの花も次々と咲き、強い香りに包まれての草とり。これも贅沢な事と思い、この時期旅行など行けないが好しとするか！

・強い香りを放っていた生垣の金木犀・・・7日ほど経つと香りもなくなり、花が落ちて地面はオレンジ色に染まった。我が家の金木犀は6年目になった。大分大きくなったため、木を少しスリムに散髪した。

・今年もポポの季節です。昨日沢山のポポ頂き、お隣さんや友人とか3件にお裾分け。皆さんポポを味わうのは初めてで、香りとマンゴーの様な味にびっくりしていた。そのポポをめぐり、水槽の魚を囲んで何やら男たちの密談。

・昨年の春に仕込んだ、シイタケがニョキニョキというかぼこぼこというか、おかげさまで今日の夕食はシイタケステーキ・・・美味しく頂きました。

・気持ちの良い秋晴れ・・・稲刈りもほとんど終わった様です。この時期、田んぼからたなびく煙、稲わらを焼いています。この煙を見ると、秋を感じる。散歩中、刻々と変わる空の色、そして夕焼けはすごかった。豊後荘病院も赤く染まって、空一面の夕焼けだった・・・

・二日間、伐採労働して折角薪にしてくれたのに、いつまでもそのままにしておくことはできない。幸い天気も回復したので早朝から薪を運び、薪小屋に積み上げた。最初友人の家の薪小屋の様に美しく積み上げたかったが、運んだ物は太さも長さも違う。最初はこだわって積んでいたが途中からそんな事も忘れ運んでは積み上げの繰り返し。午後もひたすら繰り返し。続きは、また、後日かな・・・。

・台風の影響か雨が降ったりやんだり、久しぶりに2人一緒の自由時間を家で・・・。今日の夕食は餃子、夫は時間があり気が向いたときに、餃子創りをしてくれる。それが中々美味しいのです。今度餃子パーティーでもやろうか、なんて話しながら箸が弾んで・・・！

深まりゆく秋

燕　石（えんせき）

道端には彼岸花が咲いている。別名曼珠沙華。スポーツの秋でもあるので、女子駅伝の中継放送があった。いつも気になるのは、先導する白バイ。大排気量のオートバイが2台。ランナーに排気ガスを浴びせながら走る。選手がコースを間違えることはほぼありえないので、全くの無駄としか思えない。

伴走する車両も無駄に多い。マラソンなど公道を走る大きなレースに多く見られるが、エネルギーの無駄遣いであって、大気を汚染するこうした時代に逆行するものがいつまでも続いているのはいかがなものか。選手にとっては直接、健康被害に直結する問題だと思うのだ。

スポーツ大会の運営者にとっては、選手の健康より、自分たち或いはスポンサーのことしか考えてはいない。

オリンピックの開催を強行するつもりだろうけれど、感染者は減る傾向を見せていない。検査数がいっこうに増えない中での増加である。様々な理由をつけて検査数の増加をしてこなかった。

初期の頃、「空気感染」はないなどと言っていたけれど、現状はどう見ても空気感染だろう。ミクロン単位のウイルスなのだから空気中をいつまでも浮遊する。空気感染はしないと言っていた専門家たちはどう言い逃れるのだろうか。私の知る範囲では、口を拭って知らん顔である。

新型コロナによって落ち込んだ消費を何とか押し上げようとして、ゴートゥキャンペーンを展開しているけれど、その経済効果は疑わしい。

潤うのは大手旅行代理店と、その事務手続きを請け負う大手民間企業だけである。何割かはそこで消えてしまうので、景気の底上げにはつながらない。

其れよりも、一律の給付金をあと数度にわたって実施する方が効果的だと思える。一回こっきりでやめてしまっては効果がない。さらに第二段、第三段と続けなければ大きな効果がない。

麻生大臣は貯金されたというが、疲弊した地方銀行を助けたことになっている。じゃあいったいどれだけ預貯金に回されたというのか。具体的数字を挙げてほしい。おそらくその数字がそんなに早く把握されるのは無理だ。

また、貧困層にとっては大きな救済策ともなったはず。

私個人としては、経済的に助かったし、周りを見ても多くの人が消費にまわしている。なにをもって、給付金の効果をなかったかのように言い張ろうとするのだろうか。

消費税の増税によって、景気は大きく落ち込んでいる。アベノミクスは破綻したと言っていい。給与も上がらず、ボーナスもなくなり、非正規社員は増える一方だ。最低賃金は地域格差が広がる一方。

出生数も大きく落ち込んでいる。来年は６０万人を切るだろう。コロナの所為もあるが、所得が伸びないのも大きな要因となっている。

日本の総人口は、従来の見通しよりさらに大きく落ち込み、１億人を切る日もそう遠くはないだろう。納税者数は減る一方だから、いずれはまた増税論議が起きてくる。

肝心の若年労働力が落ち込んで行けばどうなるかは誰にもわかること。

さきごろ、どさくさまぎれに、たばこの値上げが行われた。低価格のタバコほど値上げ率が高い。タバコ会社はこれによって莫大な利益を上げるだろう。

煙草による健康被害が言われているが、アルコール中毒の弊害はもっとおびただしいものがある。在宅勤務が増え、自宅での酒飲みが増えた結果、キッチンドランカーも明らかに増えた。アルコール依存症患者も増え続けている。テレビコマーシャルでは、酒類の広告が野放しである。先進国でこれほど酒のコマーシャルが多いのも異常だという。

健康を害する人が増えているのに、対策はお粗末極まる。病気になる人が増えていけば当然、医療費も増大する。経済効果はマイナスになるのは自明の事。

酒はほどほどに飲めば楽しいものだろう。それは否定しないし、かつてのアメリカのように禁酒法を施行しろとは言わない。

せめては野放しのテレビなどの広告を規制し、アルコール依存症患者の救済策を早急に進めるべきだろう。

スピード感を持って改革を進めるというが、ハンコ行政を正すぐらいでよいのか？

私見ではもともとハンコの必要性など無用と思ってきた。サインで十分であると思っている。ハンコの偽造は容易であるけれど、サインの偽造は難しい。

茨城県の難読地名とその由来（8）

木村進

大角豆【ささぎ】　つくば市

車で国道125号（354号）線を走っていると「桜土浦ＩＣ」の近くに「大角豆」という比較的大きな交差点があります。

「ささぎ」と読むのですが、これは赤飯に使う「小豆（あずき）」に似た「ささげ」のことです。漢字で書くとこれが「大角豆」となります。

小豆と大角豆は見た目も似ていますが、茨城の地方では赤飯にはこの「大角豆」を使用するようです。小豆は餡子などに使い、大角豆は煮崩れしないのでお祝い事の赤飯向きだそうです。しかし、これは地方によっても違うといいます。ササゲをほとんど使わない地方もあるそうです。区別は小豆に比べて豆が少し黒っぽく、芽のところが小豆は白いのに対して、ササゲは白い周りに黒い縁取りがあります。

「ササゲ」が「ささぎ」となったのは、方言的な要素だといっても良いでしょう。

でもなぜこの場所が「大角豆＝ささぎ＝ささげ」という地名なのでしょうか？

「角川日本地名大辞典」によると、初めのころは「大角豆房村」と言っていたが、寛文年間～元禄年間に「大角豆村」に改称されたという。寛文年間の時は麻生藩で、元禄年間からは常陸府中藩（石岡）の領地であったといいます。

したがって、この大角豆は大角豆房という「房」の字がついていた地名だったと思われます。房の形状を考えてみる必要がありそうです。これは小豆のようなイメージの「ささげ」ではなく、「いんげん」と同じような（房）形をした「ささげ」のことだったようです。

では「ささげ＝大角豆」はいつごろから日本にあるのでしょうか？

ウィキペディアによれば、平安時代に「大角豆」という記述が残されており、江戸時代の『農業全書』には「豇豆」という名前で書かれているといいます。また、アズキは煮ると皮が破れやすい（腹が切れる＝切腹に通じる）のに対し、ササゲは煮ても皮が破れないことから、江戸の武士の間では赤飯にアズキの代わりに使われるようになったそうです。

ではこの地の名前は、戦国時代または江戸初期に、この地方で、いち早く、この大角豆（ささげ）が栽培され始めたのかもしれません。

また、大角豆の房のように土地がデコボコしていたからではないかという説もあるといいます。

また、仁徳天皇の和名を「オオ-ササギ」（大鷦鷯）というが、このササギ（鷦鷯）はミソサザイ（鷦鷯）という鳥のことで、良い鳴き声と「一夫多妻」で知られている。また古代氏族の名前からという説もあるようだ。

安食　【あじき】【あんじき】

【あじき】つくば市、下妻市

【あんじき】かすみがうら市

安食（あじき）は小貝川流域の東側がつくば市で、西側が下妻市です。現在の住所表記では下妻市の大字名は消えています。

この安食地名は全国にあり、アジキ、またはアンジキと読みます。

他の地域の例としては

★アジキ

1、安食（アジキ）－千葉県印旛郡栄町　（他に安食台、安食卜杭新田、安食卜杭（印西市））

2、安食（アジキ）－岐阜県岐阜市（他に安食志良古　（アジキシラコ））

★アンジキ

3、安食西、安食南（アンジキニシ、アンジキミナミ）－滋賀県犬上郡豊郷町

4、安食中町（アンジキナカマチ）－滋賀県彦根市

名前の由来についてはさまざまで、確定したものはありませんが、

（1）、飢餓があった時でも安心して食べられる場所という説

（2）、アジ（崖）、キ（処）という意味で、アイヌ語由来の崖地の意味とする説

（3）、安食地名の中の滋賀県犬上郡豊郷町にある「阿自岐神社（あじきじんじゃ）」がその名前の元になっているとする説

特にこの（3）の説は、この豊郷町にある「阿自岐神社(あじきじんじゃ)」はかなり古い神社で、1500 年前の名園が残されているといわれています。神社に祀られているのは古事記などに登場する「阿遅鉏高彦根命（アジスキタカヒコネノミコ

ト）」です。阿治志貴高日子根、味耜高彦根などとも書きます。

この神様は、大国主神と宗像三女神のタキリビメの間の子供とされ、日本の神の中では素性の良くわからない謎の多い神とされています。詳細はここでは省きますが、この神社の説明によれば、この場所は、応神天皇の頃（5世紀頃か？）百済から渡来人であるアジキ氏が住んだところとされ、そのアジキ氏が祖先を祀るために阿自岐(あじき)神社が建立されたといわれています。池泉多島式と呼ばれる古式庭園の中に社殿はが鎮座しています。

この庭園は周辺の田畑を灌漑する用水池を原型とし、これを荘厳したしたものと考えられていますが、別な言い伝えでは、日本に漢字を伝えた王仁（わに）氏を招いて庭園を造ったとも言われています。

王仁（わに）氏は日本書紀や古事記に登場する百済から日本にやってきた渡来人で、日本に『論語』『千字文』（儒教と漢字）を日本に伝えたとされる人物です。

地名としての「安食（アジキ）」はこの「阿自岐（アジキ）氏」が由来というわけですが、何しろ5世紀頃の話ですので、明確にはわからないといったところでしょう。

しかし、この滋賀県豊郷町は「近江商人（おうみしょうにん）」発祥の地とも言われる街です。

この近江商人が「三方よし（売り手によし、買い手によし、世間によし）」を商売の心得として説き、各地を行商して歩き、商売の基本が広がりました。

このアジキ、アンジキ地名もその近江商人と関係があるのかもしれません。

また古事記などでは「アジ」＝「可美しき（うましき）」と同意語として使われていますので、「アジキ」の「アジ」には美しいというような意味が込められていたのかもしれません。

かすみがうら市（旧出島村）の安食（あんじき）地名については、明治22年に安食村・柏崎村・岩坪村・下軽部村が合併して「安飾村」ができました。この「安飾」という名前がしばらく使われていたので、「安食」ではなく、いろいろな施設に「安飾」の名前が残されています。地元の説明ではこの安飾を村の名前に使う時に、古代・中世の名前を復活させたとしていますので、大昔は「安飾＝アンジキ」があって、それが「安食＝アンジキ」に変わっていったのかもしれません。

23、圷【あくつ】城里町・水戸市

城里町…上圷、下圷、水戸市…圷大野

この「圷（あくつ）」という字は茨城以外ではあまり使われていません。

茨城県には「圷：あくつ」というお名前の方も結構おられます。

「圷」の意味は漢字が示す通り「下の土」です。

これもその言葉を表すために作られた造語と考えられます。反対語は「塙（はなわ）」です。

でもなぜ、この漢字が茨城県に多いのでしょうか。

柳田國男が昭和10年に書いた「地名の研究」の中には、「アクツ、アクト」という名前の地名を探して研究しています。その中で、下総に「阿久津（アクツ）村」地う地名を取り上げて、この阿久津は水運の発達していたときに重要な船着き場であったがこらは違うだろうという。一般に漢字の「津」というのは湊（みなと）を意味することが多いのだが、「アクツ」という言葉そのものが「低地」（特に川の近くの少しジメジメした場所）を指していると述べています。

この中に常陸国志第三、那珂郡常石郷（トキハ）の條に「阿久津は常陸の俗にいう低き地をさして呼ぶ名にて、多くは川に添ひたる所なり、或は圷の字を用ふ。今も常盤村の内にて那珂川に添ひたる地をなべて阿久津と称す。」

また、アクツと同意語として「アクト」「アクド」などをあげていて、「阿久戸」「悪戸」「悪土」「悪田」「悪田原」安久田」などの地名を列挙しています。

城里町にある「圷」「上圷」「下圷」と呼ばれる場所ですが、石岡の方から北へ真っ直ぐ続く「石塚街道」の石塚地区から先は急激なながげとなって下っていて、その下にある地区の名前です。この場所も那珂川に添った場所です。　城里町の前は「桂村」でした。

また水戸市の「圷大野」ですが、ここは那珂川の河口の方に近く水戸駅の東側です。

圷【あくつ】城里町・水戸市

城里町…上圷、下圷、水戸市…圷大野

この「圷（あくつ）」という字は茨城以外ではあまり使われていません。

茨城県には「圷：あくつ」というお名前の方も結構おられます。

「圷」の意味は漢字が示す通り「下の土」です。

これもその言葉を表すために作られた造語と考えられます。反対語は「塙（はなわ）」です。
でもなぜ、この漢字が茨城県に多いのでしょうか。
柳田國男が昭和10年に書いた「地名の研究」の中には、「アクツ、アクト」という名前の地名を探して研究しています。その中で、下総に「阿久津（アクツ）村」地う地名を取り上げて、この阿久津は水運の発達していたときに重要な船着き場であったがこらは違うだろうという。一般に漢字の「津」というのは湊（みなと）を意味することが多いのだが、「アクツ」という言葉そのものが「低地」（特に川の近くの少しジメジメした場所）を指していると述べています。
この中に常陸国志第三、那珂郡常石郷（トキハ）の條に「阿久津は常陸の俗にいう低き地をさして呼ぶ名にて、多くは川に添ひたる所なり、或は圷の字を用ふ。今も常盤村の内にて那珂川に添ひたる地をなべて阿久津と称す。」
また、アクツと同意語として「アクト」「アクド」などをあげていて、「阿久戸」「悪戸」「悪土」「悪田」「悪田原」安久田」などの地名を列挙しています。
城里町にある「圷」「上圷」「下圷」と呼ばれる場所ですが、石岡の方から北へ真っ直ぐ続く「石塚街道」の石塚地区から先は急激なながげとなって下っていて、その下にある地区の名前です。この場所も那珂川に添った場所です。　城里町の前は「桂村」でした。
また水戸市の「圷大野」ですが、ここは那珂川の河口の方に近く水戸駅の東側です。

「参考地名」

・福島県郡山市阿久津町
・栃木県さくら市上阿久津
・栃木県塩谷郡高根沢町上阿久津
・栃木県塩谷郡高根沢町中阿久津
・群馬県高崎市阿久津町
・群馬県太田市阿久津町
・群馬県渋川市阿久津
・秋田県横手市大雄阿久戸（あくど）
・青森県弘前市悪戸（あくど）
・秋田県能代市悪戸（あくど）
・秋田県能代市鵜鳥悪戸（あくど）
・秋田県能代市下悪戸（あくど）
・秋田県能代市中悪戸（あくど）
・秋田県大仙市南外悪戸野（あくとの）
・秋田県能代市上悪土（あくど）
・山形県東置賜郡高畠町安久津（あくつ）
・岐阜県郡上市八幡町安久田（あくだ）
・静岡県磐田市安久路（あくろ）

常陸旧地考（5）

菊地孝夫

○高來　たかく
和名鈔に信太郡高來郷あり、
國誌に、高來は今の、竹來と見えたり。今なお竹來村在りこれ也。
風土記の信太郡条に、高來の里は、古老曰く、天地の始め、草木言語之時、天より降りまし神の名、普都大神、葦原の中津国を巡り、山川の荒ぶるの類を平らげ、大神にことむけすでに、畢給いて、天に帰る心有り。即時、随身器仗（俗に言う鋳物）甲鉾楯剱、またとる所、玉珪みな脱すて、この地に留め置き、即ち白雲に乗り蒼天に昇り還り云々、と見える。
その地名、即ち高き所より降り来る由にて名付け給えり。

○小野
和名鈔に信太郡小野郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
いま按ずるに河内郡につきて、信太郡近く小野村有り。これなるべし。
古歌に小野の御牧と読めるもこの地なるべし。なお名所の条に云うべし。

○朝夷　あさひな
和名鈔に信太郡朝夷郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○高田
和名鈔に信太郡高田郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

國誌に、高田、今属河内郡と見えたり、今なお河内郡に信太郡近く高田村在り。上の小野村に近く、これ成るべし。

○子方　こかだ
和名鈔に信太郡子方郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○志萬　しま
和名鈔に信太郡志萬郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
國誌に、志萬は蓋し、今の浮嶋と見えたり。これ成るべし。
風土記に、乗濱の里の東に浮島村、（長さ2千歩、広さ四百歩）四方絶海、山野交錯、戸十五畑里七八町餘、所の百姓、塩火焚きて業と為す。

歩：当時の六尺。一、七八一八メートル
里：三百歩。五百三十四，五メートル
戸：五十戸で郷または里とした。それを超えたものは餘戸（あまりべ）としたという
束：つか。また握など。八㎝ほど。手のひらの幅を基とした。

○中家　なかへ
和名鈔に信太郡中家郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○島津　しまつ
和名鈔に信太郡島津郷あり、今なお郡の中霞の浦のあたりにつきて島津村在り、これなり

○乗濱　のりはま
和名鈔に信太郡乗濱郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
風土記、信太郡に、古老曰く、倭武天皇、海辺巡行、乗濱に至る。この時浜浦の上多く海苔乾したり（俗に云うのり）、このよし、のりはまの村名の由来云々。
乗濱の里、東に浮島村在り、四面絶海云々

○信太　した
和名鈔に、信太郡信太郷あり、今なお信太村在りこれなり。詳しくは郡の条に言う

○稲敷
和名鈔に信太郡稲敷郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
國誌に、稲敷（いな布）と訓注あれども、これは僻事なり。
和名鈔に、若狭国遠尓不などあるによるけれど、また筑前国志摩郡明敷（明石器）と有り、また、摂津国兎原郡布敷郷これは訓注なれど、ヌノシキと假字つけて有り。また古歌にも、稲しきの里と詠みたるもこれにて、イナシキなること疑いなし。

○阿彌　あみ
和名鈔に信太郡阿彌郷あり、
今の本に阿禰とあるは誤り也、
神名帳に、信太郡阿彌神社とあるもここで、阿弥なり
今なお阿弥村在りこれ成ること疑いなし

○驛家　うまや
和名鈔に信太郡驛家郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
厩牧令に、諸道駅を置く、三十里ごとに一驛置き、もし、地勢険阻、水草無き所には便に従い安置し里数を限らず。
この驛を即ち駅家と言いしなり。

○嶋名
和名鈔に河内郡嶋名郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
國誌に、嶋名、今属筑波郡と見える、今なお筑波郡に属して、河内郡近く島名村有。これ成るべし。

○河内　かふち
和名鈔に河内郡河内郷あり、いまは郡のみにて村は無し、
ある説に、今の牛久村の城中の辺りなりというのは、証しあるか知らず。

○大山
和名鈔に河内郡大山郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
國誌に、大山、今属信太郡と見える。
いま信太郡の東の方に寄って霞ヶ浦に沿って、大山村在り、これなるべし。

○八部　やたべ
和名鈔に河内郡八部郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
國誌に、八部（やたべ）、今属筑波郡と見える。
今なお筑波郡に矢田部村在りこれなり。郡圖を考えるに、上の島名村よりこの矢田部村あたりは、

河内郡の地になろう。
和名鈔に、摂津國八田部郡八部(やたべ)郷あり。

○真幡　まはた
和名鈔に、河内郡真幡郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
郡の中、東の方に、寄って湖のほとりに馬渡村在りマハタとマワタシと音近くれば、これではないか。なおよく考えるべし。

○菅田　すかた
和名鈔に河内郡菅田郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
三代實録に、菅田郷あり。
さて、ある説に新治郡、上境村に體見明神有。古い額に歌三首あり、その歌にすがたの神と詠んでいる。これ菅田神にて、この地いにしえの菅田郷なりと云う。この上境村、次の大村に近く、河内郡なること疑いなし。

三代實録：清話・陽成・光孝三天皇の年代記。日本三代實録、延喜元年（９０１）編なる。

○大村
和名鈔に河内郡大村郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
新治郡の南西の方信太郡河内郡近く大村在り、上の上境村の東なり、これこの大村なり。

○夷針　いじん
和名鈔に茨城郡夷針郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

さてこの夷針を神名帳にイハリと点したるにより、今もイハリと称うれども、イジンと読むべき由、本居翁の古事記伝に云われているところから、今、考えるに、茨城郡に泉村が有、ここなるべし。なお神社の条に云うべし。

○山前　やまさき
和名鈔に茨城郡山前郷あり、
國誌に、山前、今属新治郡とあり、今なお新治郡に付きて茨城郡近く山崎村有、これなり。

○城上　きのべ
和名鈔に茨城郡城上郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
さて城上は和名鈔に、大和國城上〔しきのかみ〕郡とあるによれば、シキノカミと読むべけれど、また萬葉集に、高市の御子きのべのあらき宮の時云々とある。
この城上をキノベと読みたれば、今ここの城上もキノベと読むべし。
それはこの郡の中に木植村あり、これ城上をキウエと誤りついに文字をも木植と書き換えたるもの成るべし。この類い多くあることなり。

○嶋田　しまた
和名鈔に茨城郡嶋田郷あり、今なお郡中に嶋田村在り。これ成るべし

○佐賀　さが
和名鈔に茨城郡佐賀郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
國誌に、佐賀、今属新治郡と見えたり

今なお新治郡に坂村有、これなるべし。
この地茨城郡なることは、風土記に、筑波茨城郡を分け信太郡をおくとあるにて、この辺より、信太郡にかけて、いにしえは茨城郡なること明らかなり。

○大幡　おほはた
和名鈔に茨城郡大幡郷あり、郡の中に今あるところを知らず。
大幡（おほわた属新治郡）とあり大幡はオホ旗なるを、訓注にオホ綿と有るを見れば、早くに誤りしものとみゆ。ハタと、ワタと音近し。今なお上の坂村近く大和田村在りこれ成るべし

○生國
和名鈔に茨城郡生國郷あり、郡の中に今あるところを知らず。訓点もなければいかにいうか知らず。ある説に國は園の誤りにて，生園（おその）と読むべし。今茨城郡に小曽納村在りこれなりという。オをヲに訛りたるなり。
（続く）

「火の神」の国

打田昇三

かつて大日本帝国時代には天皇家の祖先が「天孫降臨」と称して二千何百年も前に空挺部隊を率い九州に降下して来た様に伝えられてきた。誰もが疑問に思っても其れを口に出せなかった時代なので中途半端な神話に国民が騙されていたけれども文明が格段に進歩した現代は神話や伝説も科学的に説明しないと信用されないであろうと思う。王制国家として歴史の古さを伝える努力は認めるが「嘘はダメ」と学校で教えていながら、昭和二十年八月までは国家が国民に対して嘘で固めた歴史を教えていたのであるから言うことは無い。

大日本帝国が、其の様な素晴らしく無い国になりだした昭和十五年に「同じ体質の国」として相互に文化交流を深める目的から、東京帝国ホテルで「日本イラン文化協会」の発会式が行われた。イランの歴史はアケメネス王朝ペルシアに遡るから紀元前五百年代になる。最初から国民を騙していた日本では神武天皇即位が紀元前六百六十年になりイランより古い国とされていたのである。

しかし、昭和二十年の敗戦を機に嘘で固められていた日本の歴史は真相がバレて天皇制の初めが古墳時代以後に設定され、歴史の古い国の一位はイラン（ペルシア）になった。ところが、其のイランは紀元前三三一年にアレキサンダーの侵略を受けギリシア系の帝国にされていたらしい。

アケメネス王朝はペルシアに豪壮な建造物ペルセポリスを建造したのだが、アレキサンダーは其れを焼却・破壊した…と言うより、正確にはアレキサンダーが連れて来た芸者だか踊り子だかのタイスと言う女性が、酔ったアレキサンダーを唆して火を付けさせたらしい。石造りでも内部に木材を使用しているから火を点ければ良く燃える。其の罰が当たったのであろうか、アレキサンダーは遠征途中でぽっくりと死んでしまった。

其の為に、シリアに興ったヘレニズム国家のセレウコス王朝やイラン系遊牧民が建てたアルサケス王朝パルティア王国、それに東進して来たローマ帝国と西方に勢力を伸ばしたい大漢帝国とが、中国大陸の辺境やイラン、イラク、トルコなどで覇を競うことになり、怪我の功名とでも言うべきか結果的にシルクロードが通じることになった。

そして「イラン」にはアケメネス王朝の故国となる南西部のオアシス地帯に「拝火教」を信仰するササン朝ペルシア帝国が起こり、メソポタミアに進出して交易活動を行なったことが東西交流を開かせた端緒なのであろう。「拝火教」は現代でも細々ながら一部に残っていて、死者が出ても土葬・火葬・水葬・風葬など自然界にお世話になる葬式は出来ない…では、どうするのか？

死者が出ると遺体は適当な高さの山の頂上に設けられた「沈黙の塔」と呼ばれる場所に置かれる…と言うより、其処に放置される。山頂であるから静かで永眠には適しているが、其の中に狼、禿鷹、犬から肉食の猛禽類も飛来し、御経も上げず死者を喰い尽してくれる。

肉体は消滅しても霊魂は天国に行くことになるのだが、其の際に厳格な「霊魂検査」があり、正直な魂は天国へ行けるが不適格な魂は地獄に送られ。

壮絶な葬義になるのだが其れに金を掛け無い所為か拝火教信者には裕福な人が多いらしい。しかしイスラム国家になったので異教徒が金持ちではマズイ！そこで、拝火教の寺院は裏通りに、信者宅に囲まれひっそりと置かれている。

【特別企画】

打田昇三の太平記（3）巻第二-1

○南都北嶺行幸の事

格好を付けた呼び方をしているが「南都」は奈良であり、「北嶺」は比叡山のことである。元徳二年（一三三〇）二月四日、後醍醐天皇は行事担当公家の中納言・萬里小路（までのこうじ）藤房を呼んで「来月八日に奈良の東大寺と興福寺へ行くから準備をするよう…」気楽に命じた。簡単に言われても天皇が外出するとなれば犬の散歩と違い準備も費用も大変であり庶民の負担も大きい。

藤房は古い記録を探り、古老に教わりなどして日時行程、行列の規模、行動概要、警備対策などを決め、佐々木備中守と言う武士に命じて準備をさせた。重要なのは途中の川越えと日没後の照明、交差点など死角の有る場所の警備である。命じられた者は、それでも何とか間に合わせて川に橋を掛け、道中で日暮れになる地域には四十八か所に街灯（と言っても篝火であるが）を設置した。

当日の行幸路は鎧兜に身を固めた武士が要所要所を固め、天皇の行列には太政大臣などの上級公務員から関連部署の随員など…大袈裟に言うと百司千官が列を為して従った。原文に「言語道断の厳儀也」とあるように無駄な金が掛かった。

東大寺は、その昔、聖武天皇の御願に依り建立された閻浮第一の盧舎那仏（えんぶだいいちのるしゃなぶつ＝仏教社会で一番の大日如来像）があり、興福寺は藤原鎌足の遺志により建立された（藤原氏が尊敬する）大伽藍であるから、代々の天皇も参詣したかったのだが、費用・警護などに課題が多くて容易に実現出来ず、其の為に長い歳月に亘り臨幸の儀は無かったのである。其れが後醍醐天皇の代に実現されるのであるから寺院関係者はもとより、庶民まで大喜びで仏の威徳を称えた…と原本には書いてあるが、実際には道路整備などに駆り出されて庶民は迷惑したと思う。

元徳二年二月二十七日、後醍醐天皇は比叡山に出掛けて大講堂で供養をした。此の堂は「深草天皇の御願」と原本にある。歴代の天皇に「後深草天皇」は居るが「深草天皇」は居ない。実はややこしい話で、第五十四代の仁明天皇が京都深草に埋葬されているので深草天皇と言うらしい。此の人が大講堂を建てさせたのである。内部に大日如来像が置かれているのだが四百何十年も完成供養の法事が行われていなかった。其の所為では無いが比叡山も景気が悪く大講堂も壊れかけていた。後醍醐天皇は是を修繕させ供養をしたので仏教関係者は喜んだけれども、本来の仏心からしたことでは無く、鎌倉幕府に抵抗する為に比叡山の僧兵を中心とする軍事力に期待しての行動である。

丁度、良い具合に天皇の子・大塔宮護良（もりなが）親王が僧籍に入り、比叡山のナンバーワンに任命されていた。然も此の人は僧侶に不可欠のお経が嫌いで武芸が好き、明けても暮れても武術の稽古に励むという素晴らしい人物であったらしく「天台座主（比叡山延暦寺の長）始まって以来の不思議な門主」と原本に書いてある。奇行は鎌倉幕府に反抗する為の武術修行…に他ならない。

○僧徒六波羅召捕の事、付為明詠歌事

秘密というのは隠せば隠すほど漏れ易いものではあるが是が漏れると只では済まない。大塔宮の様に幕府に対する反抗的態度を堂々と繰り返していれば嫌でも情報は相手に伝わるから、鎌倉の北条高時は予側どおりに怒りまくった。それも京都の出来事を鎌倉で怒るのでは効果が薄いから北条高時は有効な対策として、承久の乱（じょうきゅうのらん＝西暦一二二一年に後鳥羽上皇が起こした倒幕運動）の例に倣い大塔宮を死罪とし、後醍醐天皇は何処かへ島流しにしようと考えた。

其の余波の様に、御所に出入りしていた法勝寺の圓観上人、近江小野の文観僧正、奈良の知教と教圓、東大寺の兵庫県支店である浄土寺の忠圓僧正らに逮捕状が出て、其れを持った幕府重臣の二階堂下野判官と長井遠江守とが元弘元年（一三三一）の初夏には鎌倉から出張して来た。其の両名が既に京都に到着したというので、どの様な乱暴な要求が突き出されるのかと後醍醐天皇は恐れていた。恐れるくらいなら最初から余計なことをしなければ良いと思うのだが…結局、幕府に対する抵抗を考えただけで何も出来なかったらしい。

五月十一日の明け方には幕府役人の雑賀隼人正（さいがはやとのすけ）が使者となり、取り敢えず圓観、文観、忠圓の三名を六波羅の幕府出張所へ連行した。忠圓は宗教界の聖人に等しい人物として知られており、幕府転覆の御祈祷などをする筈は無いのだが「後醍醐天皇に近い」というので

天皇の行動を確認する為に捕まったのであろう。他にも逮捕された者が居り六波羅に集められた。

二条中将為明という公家は歌道の達人として知られており月の夜、雪の朝など頻繁に後醍醐帝の主催する歌会に呼ばれていた為に、クーデター計画には全く無縁で、謀反の嫌疑も無かったのだが天皇の言動を調べる目的から逮捕され、斎藤と言う幕府役人に身柄を拘束されてしまった。逮捕された高僧たちは（重罪と認定されているので）鎌倉へ連行されて取り調べが行われる身分？であるから六波羅には拘留されていただけである。

二条為明については京都で尋問して白状したなら鎌倉へ報告するように指示が有ったので担当の武士が先ず拷問に掛けることにした。最も効果的？なのは「火攻め」である。六波羅庁舎の庭に炭火を熾（おこ）し炎熱地獄の様にしてから其の上に青竹を割り並べ少し隙間から火が吹き出す状態で其処を歩かせるという方法が適用されることとなり早速、実行に移された。現場に連行された為明は其の様子を見て役人に「筆記用具は有るか？」と訊ねたので、役人たちは火に恐れて白状をするのかと思い、紙と筆を差し出すと為明は、すらすらと一首の歌を書き付けたのである。

思いきや我が敷島の道ならで
浮世の事を問わるべしとは

（自分が専門とする歌道のことでは無く、無実の罪で拷問されるとは予想も出来なかった…）

此の時に取り調べを担当していた常葉駿河守という武士が教養のある人物だったので、歌の意を察し、此の被告には謀反の心など無いと判断をすると共に為明の態度に感服した。周囲に居た者も同様であった。二条為明は釈放されたのである。

元来、詩を詠み歌を作ることは朝廷に集う者たちの嗜みであり、弓馬の道は武士の得意とするところであるが、此の度のことは双方の感性が一致して無実の者が拷問などの野蛮な行為を受ける事が無く済んだ。この様に力に依らず天地を動かし目に見えぬ鬼神の心を和らげることが出来たのは和歌の心が双方に有ったからで「…男女の中を和らげ、猛き武士の心を慰めるものは歌なり…」と、古今集の序文に紀貫之が書き残しているのも道理で有ると思わずにはいられない。

○三人僧徒関東下向の事

元弘元年六月八日、鎌倉から派遣されていた武士たちは、逮捕状により身柄を拘束中の三名の僧侶を連行して鎌倉へ向かった。

忠圓僧正は、浄土寺・慈勝僧正（関白・藤原家基の子）の高弟であり「十題判断の登科＝難解な試験」に合格したという秀才である。

文観僧正は播磨国法華寺の住職であったが醍醐寺に移住して真言（仏教の真理）を会得し大阿闍梨（師範）の資格を得た高僧である。

圓観上人は僧兵出身であり本来は武士同様に頭脳より体力で勝負するタイプであるが学問にも秀でていたので自然と目立つ存在になり、良いこと悪いことで評判が立った。是ではいけないと反省して比叡山西塔北の谷で修行を積んだ。「徳は孤ならず必ず隣有り…」と言うように、いつしか努力が報われ遂に後伏見天皇から光厳天皇まで五代の天皇に仏の道を説くまでになったのである。

三人の高僧は共に知識が有り修業を重ねた有徳の身でありながら、権力の弾圧に苦しめられるというのは前世の宿業であろうか…犯罪を犯した訳では無いのに奈良・京都から鎌倉まで遠路を遥々と囚人として護送される苦しい旅が待っていた。

内容は兎も角、官権に依り逮捕護送される身であるから見送り人は期待出来ないが、それでも圓観上人には三人の弟子（宗印・圓照・道勝）が囚人護送車（輿）の周りに従った。然し文観僧正と忠圓僧正には従う者が居らず乗り物も馬の背で有るから楽では無い。勿論、周りは警護の武士たちに囲まれている。夜も明けぬうちに都を発った。

道中でも誰が言い出したか、鎌倉に着く前に途中で殺害されるのではないか？と言う噂が流れたから、休憩で行列が止まる度に、或いは宿場へ着く度に、三人の僧は身の縮む思いをしながら旅は続き六月二十四日に鎌倉へ到着した。そこで圓観上人は佐介越前守に、文観僧正は左介遠江守に、忠圓僧正は足利讃岐守（足利尊氏の父親）にそれぞれ身柄を預けられた。護送して来た二階堂、永井の両名は圓観上人らが都で祭祀していた仏壇の状態、御本尊の形などを模写して来たので、それを報告書に付けて幕府に提出したのだが、素人が見ても仏壇のことなど分かる筈がない。

そこで鎌倉で高名な佐々目頼禅という僧正を呼んで鑑定させたけれども京都と鎌倉では仏像・仏画にも違いはある。頼禅も「分かりません」とは言えないから無責任だが「是は（幕府が判断されたとおり）調伏（呪い）の法が行われたものです」と適当に答えておいた。酷い話だが其れだけで都

から来た三人の高僧は謀反人にされてしまった。早速、鎌倉武士の詰所で火と水を使って嗷問に掛けられることになり、文観が最初に選ばれた。容赦の無い責めで意識朦朧としたところで誘導尋問があり「後醍醐天皇の仰せに従い幕府調伏の法が行われた」ことを白状させられた。

次に指名された忠圓は、恐怖心から嗷問が始まる前に後醍醐天皇の言動から大塔の宮の不穏な発言や天皇側近の者たちの行動などを推測や創作も交えて全て白状したから立派な「幕府転覆運動の筋書き」が出来上がった。それが自白調書として採用されたので助かり様がない。最後の詰めとして翌日に圓観上人を証人喚問する予定であった。ところが其の夜に鎌倉の主・北条高時が奇妙な夢を見た。比叡山の東坂本から数千の猿が下りて来て圓観上人を守護するように群がる夢である。

鎌倉の主、武士の頭領などと威張っていても所詮は人間であるから夢の内容が宗教に絡むと弱気になる。自分の行動に疾（やま）しい点が有れば尚更である。北条高時も自分の夢に脅えて圓観上人らの嗷問を暫く猶予するように使者を出した。同じ頃に、圓観上人を預かった武士から報告が来て「…尋問の為に夜明けを待って上人の許へ行きましたところ（上人は）燈明をあげ定座されており、其の影が障子に映って其れが不動明王のお顔に見えました。驚いて取り敢えず御報告に参上した次第です…」と言う。通常ならば家臣の進言など無視する高時であるが「猿軍団」の夢を見たばかりであるから弱気になっていたのである。

そう言う経緯から後醍醐天皇近辺にいた高僧たちも拷問はされずに済んだが、七月十三日には遠方へ流罪の判決が言い渡され、文観は硫黄島（喜界島）へ、忠圓は越後国へ送られ、圓観は少し減刑されて結城上野入道宗広に預けられたのだが、結城宗広の領地が奥州であった為に其処まで連れて行かれたから道中の苦労は流罪と変わらない。

その昔、中国の一行阿闍梨（「あじゃり」は師範となるべき高徳の僧）は為政者の弾圧を受け遠方に流罪となった。圓観も、その時に一行さんが「水辺に宿り山道に苦しんだ」悲しみもかくやと思い知らされる旅になったのである。鎌倉から奥州へ上野発・常磐線回りか東北本線経由かは分らないが日数を経て仙台の手前、名取川を越える場所まで来た。其処で圓観は一首の歌を詠む。

陸奥（みちのく）の
うき名取川流れ着て
沈（しずみ）や果てむ
瀬々の埋もれ木

歌など読んでも何の足しにならないが、原文には「徳の有る聖者も免れ得ない災禍の例」…として天竺（てんじく＝古代インド）に有った話を載せているので紹介して置く…首都のデリーから南東部へ八百キロ程離れたガンジス川支流域にバラナスィーと言う都市がある。古代には天竺の波羅奈国（てんじくのばらないこく）と呼ばれる都市国家が在った。其処に仏教の三学（戒律・知恵・定学）を備えた一人の高僧が居り、王国の国師として人々に崇められていた。

有る時に此の国の王が法事をするので高僧は導師として呼ばれて王宮へ行った。其の時に王様は誰かと碁を打って居たので取次の者が「導師が来られました…」と報告をしたけれども王様は盤面に夢中で聞く耳を待たない。丁度、王様が囲碁の手に付いて思わず「切れ！」と叫んだ。取次の者は是を聞いて「導師を斬れ！」と命じられたものと錯覚した。確認をすれば良いものを王の命令には逆らえないと、其の侭、高僧を表に連れ出し刑務所に渡して首を刎（は）ねさせた。

囲碁の勝負が終わって王様が高僧を呼んだところ刑務所の高官が「王命に依り処刑致しました」と報告をする。是を聞いた王様は烈火の如く怒り「…行死定まりて後、三奏す…」と言う。それを一言のもとに重大な誤りを行って王の不徳を重ねるとは許し難い！と、取次の家臣は親類縁者全てが厳罰に処されたのである―其の様なことで、此の場合の高僧は罪無くして処刑されたのであるが、国王は、其の事が只事では無いと思い阿羅漢（あらかん＝仏教修行の最修段階を会得した聖人）に問い質した。阿羅漢は七日間の行で得た答えを王に告げたのである。（科学的根拠は無いが）

其れに依れば罪無くして首を刎ねられた高僧は前世が農耕を業とする田夫（農民）であり、王様の前世は水に棲む蛙であった。或る時に、農夫が田を耕していて振り下ろした農機具の先で蛙の首を切ってしまった。其の因果に依り、田夫は沙門（僧）に生まれ、蛙は波羅奈国の大王として生まれたのだが僧を死罪に処してしまった…と言う。

お粗末で残酷な話であるが、如何なる因縁に依るか国王の身で有りながら不慮の罪に心を沈ませられること、不思議であると言う他は無い。

（続く）